

代表作⑦ 時代小説

日本文藝家協会編



日本文藝家協会編

代表作時代小説

第七卷

編纂委員

富田常雄

山岡莊八

村上元三

武蔵野次郎

東京文藝社

代表作時代小説 普及版 九五〇円
第七卷

昭和五十三年十月十五日発行

編纂者 日本文藝家協会
発行者 角谷奈良雄

発行所 株式会社東京文藝社
本社 東京都新宿区大久保二六〇三
出張所 東京都新宿区弘方町一番地
振替・東京六一二七五七
電話・(二六〇)二五五〇

0093—789807—5170

無検印承認

まえがき

時代小説選集の編集も、文藝家協会の仕事の一つとして、ようやく定着した読者を持つようになつて来た。長篇を収録し得ない関係からその年度の傑作秀作を網羅したと云いきることは出来なくとも、ここに一つの代表的な傾向を見ることは出来ると思う。

作品の選定にあたつて毎年問題になるのは、その作品の文学性と、新鮮感と、そして魅力の有無の三点のようである。しかもこの三点とも選者それぞれの好みによることで、べつに明確な規準があるわけではない。中には、同一作家の作品で、選者の間では何れが佳作とも決定しかね、作家自身に選んでもらつた作品もある。それはその方がよいと思つてゐる。

何時も問題になる三点は改めて記すまでもなく、今後も自然に選定のめどになつてゆく。少くともその年度を代表する小説選集である以上、読物であつてはならず、隨筆であ

つても困る。どこまでも小説としての文学性だけは持った作品でなければならぬ。新鮮感や魅力となるとこれは一層まぎらわしいが、強いて云えば、その両者とも、小説の本質に根ざした新鮮さであり、魅力であつて欲しいと思う。と云うのは、材料の新鮮さや、テーマの魅力が必ずしも小説の魅力になるとは限らないからである。その意味では時代小説の作家もまた、小説の本質ときびしく対決して、独自の世界をきりひらいてゆくだけの真摯な庖丁人でなければならぬ事は云うまでもない。

本年度の編集では殆んどの選者が、新人の登場を歓迎する空気にあつた。しかし読まれた多くの作品の中には、作家の心構えの不足から、読物に墮したり、通俗にすぎたりして、収録しかねたものが多くあつた。

圧縮された小さな革袋に、作家の生命を刻み込む短篇の制作は、作家にとつて、ぬきさしならぬ一つの試合の場でもある。そうした意味での代表作時代小説の筈だと思ふ。

昭和三十六年

山岡莊八

目 次

新説信太狐	蠟燭の火が消える	六弥太の報酬	丹後ばなし	明星	銀座煉瓦街始末	お庭番秘情	一色崩れ	明石の月	近藤と土方	島名主	ばけの皮	妙音記
黒岩重吾	村上元三	南條範夫	中澤至夫	中山義秀	永岡慶之助	川上直衛	海音寺潮五郎	富田常雄	戸川幸夫	新田次郎	石川淳	池波正太郎
一九五	一八一	一五五	一四九	一五三	一九九	一五	一五	一五	一四	一五	一三	一七

まへがき	山岡
あとがき	村上
	元三

妙^{みょう}

音^{おん}

記^き

池
波
正
太
郎

作者のことは

池波正太郎

この小説をかいたのは、去年の夏の盛りでした。

主人公の佐々木留伊女のこととは、種々の武芸関係の書物やら、その他の雑書に散見しますが、わたくしは、留伊女のモデルとして、わたくしの知っている女武道家（現代にも女武道家は、諸國に多勢いらつしやいます）をイメージに執筆いたしました。

三十枚弱の短篇というのは、まことにむずかしく骨が折れてならないのですが、この「妙音記」をかくとき、つとめて気をらくに、楽しんでかこうと念じながら仕事をしておぼえがあります。

その結果が、どうなつて作品にあらわれたかは自分でわかりませんが、いま読み返してみても、出来不出来はともかく、この「妙音記」は、わたくしにとつて好きな作品のひとつであります。

それはたぶん、小説にかきたいと思つていた（おなら）のことがかけたからでしょう。

著者略歴

本名 池波正太郎

大正十二年一月二十五日 東京生
東京都品川区荏原二ノ二三四

日本文芸家協会々員

（小説） 恩田木工、眠、信濃大名記、応仁の

乱、賊将、錯乱（三十五年上半年直
木賞受賞）

（戯曲） 鈍牛、檻の中、渡辺華山、名寄岩、

黒雲峠、牧野富太郎、決闘高田馬場
剣豪画家、賊将、その他

（現住所）下142品川区荏原二ノ二

一

女武芸者の佐々木留伊が、夜の町に出没して「辻投げ」を行うのも、つまるところは、男を漁り男を得、子を生み、妻となり母となりたいがためのことなのである。

けれども、女一般が、本来その女体にそなわつた本能が命ずるまま、無意識のうちの媚態媚情をもつて異性を牽こうとするのと同様に、留伊もまた、自分の、女だてらに乱暴な所業を意識しているわけではない。

とにかく、いまの留伊が、何よりも男を欲しがつていふということに異論はあるまい。

それも自分にふさわしい、と言うよりも佐々木の家にふさわしい男でなくてはならない。他の女が異性の風姿容貌に選択の眼を熱中させるのと同様、留伊にとつては、まず相手の武芸が問題となるのである。

「これ、留伊。何も武芸指南の家柄を継げというのではない。そなたに配偶者さえあれば家名がたてられるのだ。殿様のお氣が变らぬうち、一時も早く、相手を見つけて出すことが肝要じや。わしに任せてくれんか、悪いようにはせぬ。あの頑迷な、そなたの父も今は亡い。よつて、そなたを望むものは、いくらもあるじやろ。いや、ある筈じや」

しばしば留伊を辰之口の江戸屋敷へ呼びつけては、叔

父の中西惣太夫が説得にかかると、留伊は、
「私を打ち負かすほどのお方なれば、否やは申しませぬ」

頑強に答えるのみであつた。

惣太夫も呆れて、それではとても家名を起すことが出来ないではないかと詰ると、思う相手が見つからぬ上は、このまま家を潰すのも已むを得ない、何事も父の遺志であるがらと答えて、留伊は執拗に、自分との試合に勝つた者でなければ結婚しない、いや出来ないと言ひ張るのである。

近頃は、惣太夫もあきらめたものか、呼出しもかかつてこない。それに、留伊が藩邸へ来るたびに、惣太夫は大いに赤面するのであつた。

「留伊が来るのもようございますが、そのたびに私どもも恥かしい思いをせねばなりません。まるで見世物のような——女だてらに、まあ何という真似を……」と、惣太夫の妻も顔をしかめる。

留伊は髪を若衆髻に結び、薄むらさきの小袖、黒縮緬の羽織に四ツ目結の紋をつけ、素足に絹緒の草履をはき、しかも細身の大小を腰に横たえ、肩で風を切つて藩邸へやつて来る。

「やあ。佐々木の女焚^{はか}噺^{ばな}が来たぞ!!」と、屋敷内の侍、足軽、小者に至るまで飛び出して来ては、目ひき袖ひき、

これを見物するのだ。

すらりと引締つた留伊の肉体は爽やかに動き、優美な男装を颯爽とひきたてる。化粧ぬきの健康な小麦色の面は冴え、切長の眼が正面を見据えたまま、すたすたと通り過ぎるのを見送つて、家中の若侍共も、ちよつと息を呑むかたちになる。

「留伊殿の、あの一文字に、きゅつと引いた眉の濃さ——ありや、毛深いぞ」

「なめらかな肌をしとるなあ、おい」

「くそ!! おれは、あの女樊噲の男装をはぎめくつて、中身へ飛びかかり、思いきり翻弄してみたくなつたわ」

「おれもだ。ええ、もうそうなつたら、あの女樊噲め、どんな音をあげるか、こいつ考えただけでも武者振いがする」

「思いきつて婿入り試合をやつてみろよ」

「ひや——それは御免、御免」

男装の留伊の妖しい倒逆的な魅力に奇声をあげる若侍達も、彼女と立合つて勝つ自信は微塵もない。現に——勢込んで婿入りを望み、無惨にも留伊の腕力に屈した者が何人もいて、これは家中の笑いものとなり終つた。

「わしの心も知らずに、留伊のやつ……もう勝手にせい」と、叔父の惣太夫も匙を投げたようだ。

留伊は、土井大炊頭利重（古河十万石）の家中で武芸指南をつとめていた佐々木武太夫の一人娘であつた。

十七歳の春に御殿へ上り、利重夫人の侍女となつた。利重、早くも留伊の美貌に眼をつけ、或夜、機会をとらえて留伊の後から抱きつき、その頂を吸わんとした。

利重の唇と両腕は、むなしく空間に泳ぎ、「これ!! 留伊。余に逆らうか——」と、君主の威厳を誇示して再び差しのべた利重の右手を、留伊は無言のまま、ふわりと掴んだ。

手から全身へ、おそろしい痛みと痺れが衝きあげ、利重はうめいた。

「放せ。いささか、たわむれたまでじゃ。放せ」

「おたわむれ遊ばしませぬな?」

「おう……せぬ。せぬから、放せ」

このことを、利重は笑つて夫人に打明け、「よほど武太夫から仕込まれたものと見える」と、感嘆した。主君の手をひねつて痛い目に会わせたからには、留伊も決死の覚悟であつたのだが、以来、留伊は利重夫妻から深く信頼され寵愛を受けるようになったという。留伊の誠実な奉公ぶりは、誰の目から見てもあきらかであつた。

留伊の父、佐々木武太夫は、一刀流の剣術、柳生流の鎮、神道流の馬、関口の捕手と柔術、それぞれに奥義をきわめたほどの達人である。

「責而者草」という本に——娘於留伊に幼少より鍛錬させ、女ながら事にのぞまば一方の用に立つべしとて、残らず伝授せり（中略）家に男子なきため、再三、養子すれども、偏屈に武張りたる武太夫なれば、尻を据えるものなし。これによつて相続の子なく、終に武太夫病歿す。亡後の養子叶い難く、家名断絶す。留伊、残念に思えども武家の法なれば詮方なく（中略）御暇願いて浅草聖天町に引移り、表口三間に黒き格子つけ、玄関に槍、長刀、具足櫃等を置き、入口には暖簾をかけ、宿札には「武芸諸芸指南所、女師匠佐々木氏」と記す——と、佐佐木父娘について記されてある。

留伊は、母が病歿した五歳の夏から父の教えを受けた。晩婚の武太夫は、以後、再婚を望まず、養子によつて家督させるつもりだったが、前述のように、到底、武太夫の厳しい鍛錬に及第するものはなかつた。

留伊が二十歳の冬に、武太夫は六十二歳で急死した。死にのぞみ、武太夫は留伊に言つた。

「すべては終つた。わが家は武道をもつて禄を食んできた。今どきの脆弱な若者どもを養子にする位なら、この家、潰しても惜しくはない。お前も、覚悟しておれ」

男子なき家は断絶と決つたことだが、利重夫妻は留伊の身を心配し、婿とりが決り次第、家名をたててやろうと言つてくれたし、中西惣太夫はじめ親類一同が利重の

意をふくみ、家中の次三男のうちから種々多様な候補者を見つけてきては、留伊にすすめた。

すると留伊は——身分の上下、容姿の如何を問わず、自分を打ち負かしたものであれば、よろこんで迎えたと言ふのである。

武太夫ほどのことはあるまいからと、ここ二年のうちに、十余人に及ぶ候補者が名乗り出たが、駄目であつた。

聖天町の自宅へ、五間に三間という小さいながら板張りの道場を設けた留伊は、ここに候補者を通し、さんざんに打ちのめしてしまふ。

留伊にしても、今では亡父の遺志を、それほどまでに遵奉しているつもりはない。しかし、彼女が父武太夫一人の手で生育された過程に於て、根強く彼女の心身を支配する武術への憧憬を信頼と矜持を排除してまでも、わが一生を託す気にはどうしてもなれないのである。

婿とりすれば家名をたてようと殿様が言つてくれているだけに、留伊も必死であつた。ぐずぐずしていれば折角の好意を無にすることになるし、余り強情を張りつづけては殿様も不快になつてしまふだろう……と、気が気ではない。

それにしても、現われる候補者のどれもこれもが、余りにも拙劣な武芸しか持ち合せていないのを知り、留伊

は呆れ返つた。

戦国の世が終つてから約五十年。徳川幕府統治の下に平和と繁栄が約束されたという武士の世界には、もはや武芸などは不要のものとなつたのか……。

剣の捌き方も満足に知らず、五体五感の働きの深奥をきわめようとせず、小器用に算盤をはじく頭と手を持つていれば、それでよいのか……。

(武芸をきわめることは、とりも直さず、人としてあらゆる用に通達すべきもの——と、父上はおつしやつた。だのに、このありさまは……女の私に指一本させぬとは……いずこの家中も、みなこの程度なのか——それにしては余りにも情けない男達ばかり……)

留伊は嘆息した。

それにしても留伊は強すぎたのである。

試みに夜の町へ出て、通行の侍に挑んでみた。ところが、今までに一人として留伊の挑戦を撓ね退けたものがない。

「曲者!!」などと一応は嘆き、抜刀して飛掛つて来るものもいるが、腰軍にかけて投げつけてやると、泣くような悲鳴をあげて逃げて行くやつもいる。

当時は、旗本奴とか町奴とか、武家にも町民にも荒つぽい気風があつて、伊達風俗に肩をそびやかし、刺激のなくなつた平穩な世相に逆らい、むやみやたらと喧嘩を

売つたり買つたりする乱暴者も多かつたのである。

白柄組とか角袖組、身狭組、神祇組など、党を組んで市中を押廻る乱暴旗本を狙つては、留伊が挑みかかる。

相手も、むろん黙つてはいない。

——或は宿所へ仕懸け、または大道にて、腕に覚えのある者ども当り見れども、皆手ひどき目に逢える故、この婦人に手を出す者もなし——と、昔の雜書にもある。あるとき、夕暮れの吉原田圃で、荒くれ旗本五人を相手に闘い、一人残らず田圃の泥中にめり込ませたこともあるという。

(どうして……世の男どもは弱いのか……)

どうして、私はこんなに強いのかと自惚れないところは可愛いのだが……。

留伊の發育佳良な肉体は熟れきつてゐる。

その肉体と、日毎にたかぶつてくる女の感情を押えてゐるものは、骨の髄まで沁み通つた亡父の訓育である。鍛錬である。

そのことに気づかず、留伊は鬱積した苦惱を、悶えを、ただひたすら武芸の發揚に叩き込む。その目標にされたものこそ災難であつた。

夜毎さまよい出ては敢行する「辻投げ」に、または道場へ押しかけて来る荒くれどもを相手の闘いに、留伊は

夢中になつてゐる。

体得した武芸のうち最も得意な柔術の技をふるつて「辻投げ」をはじめたのも、もしや候補者が……という期待からであつたのだが、現在の留伊には、それにもう一つのものが加味された。

（早く、私を負かしてくれる人が現われないものか——それでないと、家名が潰れる。父上に申しわけがないもの。それに、私だつて……）

などと、堅くふくらんだ乳房をひとり抱いて眠れぬ夜があるかと思へば、

（まあ、今夜の侍の何と他愛もない。肩を入れて放り投げたら、五間も飛んだもの）

得も言われぬ爽快さに陶然となることもある。

女武芸者、佐々木留伊の名は江戸市中の評判となり、その評判は、留伊にとつて意外なほどに高まつていつた。

二

寛文二年三月二十五日——留伊は、常磐橋内の北町奉行所から召喚を受けた。

奉行の村越吉勝は、みずから留伊を引見した。

ここに於ても、留伊が述べることに変わりはない。吉勝は苦笑し、嘆息し、男装にしまつつけられてゐる留伊の女

体を眩しそうに見守つたのち、

「わしが若い頃なれば、そのままには捨ておかぬところだが……」

と、思わず洩らした。

「ま——おたわむれを……」

吉勝の、男を露呈させた双眸の輝きを見て、留伊の頭から面へ、見る見る血がのぼつた。

「それにしても市中の評判が騒がしすぎる。奉行所としても打捨てておくわけにはゆかぬ。もしも流血の争鬭を見るようなことになつてはと思ひ、そなたに来てもらつた」

「申しわけございませぬ。以後は、きつと慎みまする」

「そうしてもらいたい、頼むぞ——いや、理由を聞き、わしも得心した」

「何とぞ御内聞に……」と、留伊は恥かしそうに頼んだ。奉行は「心得ておる」と受け合つてくれた。

聖天町の浪宅へ帰つて来ると、老僕の甚七とその孫娘で今年十五歳になるおちいが喜色を現わして、留伊を迎えた。

「一体、どうなることかと思つておりましたが、何事もなくて、ようござりました」と、よろこぶ甚七に、留伊は、

「暴れ者相手の喧嘩三昧を禁じられてしもうた。それが、つまらぬ」

「何をおつしやいます、そのような……こうなつてはお嬢様。何ごとも中西様へお任せして、温和しう婿とりなされました方が……」

「申すな!! 何も申すな」と、まるで武家言葉だ。

日がたつにつれて、留伊の様子が異様なものになつてきた。早朝から道場へ出て、独り稽古をするのだが、傍で見ていて、甚七もおちいも目を瞠るばかりである。

六尺余の鉄棒を振り、二百回三百回と打込みをやり、次いで気合も激しく道場を走り廻つては宙に跳び、猫のように一転、二転と宙返りをやつては、またも跳ね飛ぶ、といったような稽古を繰り返す。それから長刀である。槍、木刀である。得物を取替へ汗みずくになつて二刻(四時間)は、たつぷりとやる。道場へ来ていた門弟も寄りつかなくなつてしまつた。門弟は主として町民であつた。町奴のような乱暴者もいた。留伊の教導が囁んでふくめるようなので評判もよく、近頃では冷やかし半分の連中も淘汰され筋のよい者達が二十名ほども通つて来ていたのだが、一度に姿を消した。留伊の稽古ぶりが豹変したからである。

「そのようなことで武芸が体得出来るおつもりか!!」
絹を裂くような叱咤と共に、寸毫も容赦のない打込み

がかかる。腕を掴まれ、足を払われ、叩きつけられる。汗に蒸れあがつた強烈な留伊の体臭を嗅ぐことは門弟一同のこたえられない楽しみであつたのだが、今や、そんな余裕があるどころではない。道場へ行けば、留伊の激発の餌食となること必定であつた。

今はただひとり、留伊が道場で荒れ廻つてゐる。

そうかと思うと、不気味に静まり返つたまま、夜が明けけるまで居間に引きこもり、何かしているらしい。

そうかと思うと、前には手もふれなかつた台所へやつて来て「私がやる!!」と、おちいの手を払い、米をといでみたり汁を煮てみたりする。これには甚七もおちいも困惑した。飯も汁も武芸のようにはいかないらしい。留伊がつくる飯は砂利のように固く、汁は舌が曲るほどに辛い。

「お嬢さま。私がやります」たまりかねておちいが手を出すと、たちまちに眉をつり上げ、

「お前は、私を女だと思つていないのであらう。女のこと何を何も出来ぬと見くびつているのであらう」

「いいえ——そんな……」

「どうせ、私は嫁にも行けず婿もとれぬ女だ。おちいに見くびられても仕方がない」

「そんな、お嬢さま……」

「ええ。もう何とでも言え。思うまま私をからかうがよ